第５節　〔教材２－５〕ワークショップ　この気持ち理解できますか？

ねらい

グループの中で他者の意見をしっかりと聞き、自分の意見を言えるようにする。そして、そのなかから、自分の生き方をふりかえりより良い社会を作っていくための責任について考える。

準　備

・以下の、４種類のコーナー添付用カードを用意し、教室の四隅に貼る。
資料：「このばばあ、死ね」と言った少年の気持ちが……
A．理解できる。
B．少しは理解できる。
C．あまり理解できない。
D．理解できない。

展　開

(1)　教師が新聞記事を読み上げ（あるいはプリントを配り、生徒に読ませる）、生徒は自分の選んだ４つのコーナー（選択肢）の中の一つのコーナーに移動する。
(2)　同じコーナーに集まった生徒同士で車座になり、なぜそのコーナーを選択したのか、理由をメモ書きし、そのメモをもとに話し合う。
(3)　各コーナーの代表者（まとめ役をあらかじめ決めておくとよい）に、(2)で話し合われたことをまとめて発表してもらう。
(4)　質疑応答の時間…それぞれのコーナーに向けて、質問・意見などを自由にやりとりする。
(5)　移動の時間…(4)のところで考え方が変った人は、自由に変わったコーナーに移動する。…この時、教師は「なぜ移動したのか」を問い、その理由を答えてもらう。
(6)　振り返りの時間…全員にメモ用紙を配布し記入させ、何人かに書いた内容を発表してもらい、活動を振り返る。

資　料

ここに紹介した、文中の少年の言動について話し合ってみましょう。

【「このばばあ、死ね」～天声人語から～】

神奈川県に住む66歳の女性から、次のような手紙をいただいた。

私はつねづね赤ちゃんを抱いて電車に乗る人には席を譲ることにしています。ある日そういうお母さんが乗ってきました。さっそく席を替わりました。その人は「隣の駅で降りますから結構です」といいました。隣といっても急行なので数分かかります。

重ねてどうぞと申しました。すると、座ったその人の前に高校生ぐらいの男の子が立ちました。やがて駅に着き、礼を言って降りる人のあとへ私は座りました。さっきの男の子はリュックを肩から降ろし座る体制になりましたが、座っている私をみて叫びました。「このばばあ、死ねっ！このばばあ、死ねっ！おまえなんか生きているのは税金の無駄遣いだっ」。あとは悪口雑言の限り。

よっぽど胸ぐらをつかみ「おまえに死ねなんて言われる筋合いはない。私はまだ納税者だぞ。おまえがタダで使った小学校の教科書は、私が取られた税金で払ったんだ」とか言おうと思ったのですが、もし刃物でも持っていたらという恐怖がよぎり、目を合わせないようにしました。

（平成８年９月６日付　朝日新聞）

参　考

下の文章も合わせて読み話し合いましょう。

「若い人たちの茶髪がどうも気になる。うちの会社は客相手の仕事が多いから、茶髪やピアスを禁止にするか……。」

最近、経営に携わるものとして、こんなことを考え始めていました。ところが、その考えを打ち消すようなできごとに出会いました。

電車の中のことでした。その日は、買い物客やスキー客で混み合い、つり皮を握る手に思わず力が入るありさまでした。案の定、シルバーシートもサラリーマンや若者で占拠されています。ネクタイをぴっちりときめた紳士、参考書に目を落としている高校生、談笑に余念のない会社員らしい若い男女等です。

そして、その中に金髪に染め上げ、流行のピアスをつけた若者もすわっていました。周囲のものは、彼に遠慮するように、混み合っている中でも間隔を置いているのが分かりました。

やがて電車は松本駅につき、両手に買い物袋を下げた７、80歳ぐらいのお年寄りが乗り込んできました。混雑の中で荷物が置けず、苦しい様子が一目瞭然です。シルバー

シートの諸氏も、一度は目に止めたと思いますがじっとしていました。そのときです。先程の金髪の若者が「おばあさん、どうぞ」と、声をかけて立ち上がりました。おばあさんは何度も礼を述べると安心したようにすわりました。若者は、おばあさんが下車した後も立ったままでした。おかしなことに、状況を知っている周囲の者は、空いた席へすわることもしませんでした。

おばあさんが乗った時、私の頭の中には、〝真っ先に席を譲るのは紳士かな、高校生かな〟という意識が生まれました。見かけで人間をとらえてきた結果だと思います。同時に、これと同じような場面が日常生活の中にはありはしないかと恐ろしくなりました。

このようなことがあって、茶髪禁止の考え方をもう一度考え直してみようと思い始めました。

（同和教育つうしん第14号（平成９年３月31日）より）

5　資料の使用について

ここでは、異なった意見を述べ合うことによって、物事を多面的に見る訓練を行い、そこから、他人から与えられるのではなく、自分自身の考え方を見いだしていくことを目的としてみてはどうかと思います。

この例の場合は、少年の言葉に秘められているかもしれない、社会への鬱積した気持ちや、「キレる」若者といった部分への切り込みができれば、そこから「生きる」ということがどんなことなのか、考えることができる材料になるのではないかと思います。

ただ、この時、少年の「死ね」という言葉は、どんな状況であっても、絶対に許されるものではないということは是非とも押さえておきたいと思います。人間の存在そのものを否定してしまう言葉だからです。